

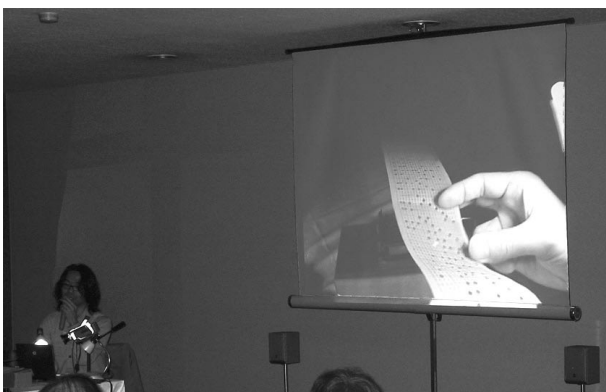
して、それからヒントを得て創った様々な作品を見せてくださった。その代表的な物は「テノリオン」と言うものだった。誰でもいつでも使いやすくするために創ったその「手乗り音」のいろんなバージョンを見せた。

岩井さんの作品はただ光と音楽にとどまらないで、時間の遅れを利用した映像の紹介へと続いた。それはまるで3次元の実世界と時間を結んだ4次元の世界を見ている感じであった。原理はそんなに複雑ではなかったが、その効果は素晴らしかった。お客さんの中で一人に参加してもらってその場で見せた映像と、後ろにあるドアを開けたあとで閉めて見せた映像には感嘆する以外にはなかった。芸術家は確かに小さい発見から素晴らしいものを創るものだと感心した。

岩井さんが使った技術は、考えるとそんなに有用な技術ではない。一方、むしろ技術者として見たら無駄なものかも知れない。しかし、芸術家の手によって再創造されたその技術は、素晴らしい作品となり人々を楽しませてくれる。



講演の様子



講演される岩井先生とミュージックボックスの紙

◆パネルセッション報告 Telecommunication, Teleimmersion and Telexistence: Seeking a New Paradigm for the Future 杉本麻樹

(科学技術振興事業団 / NTT)

会場となった東京大学山上会館大会議室は、ほぼ満席となり、ICAT参加者のパネルセッションに対する高い関心が伺われた。このセッションでは、パネリストとして、館教授(東京大学)、Andries van Dam教授(Brown University)、Henry Fuchs教授(The University of North Carolina at Chapel Hill)、Thomas A. Defanti教授(University of Illinois at Chicago)が登壇し、各教授が研究プロジェクトの紹介を行いながら、テレコミュニケーションとテレイメーション、テレイグジスタンスをテーマとしてディスカッションを行った。アーキテクチャの進歩によるコンピュータグラフィックスの表現能力向上とこの分野との関わりといった事も交えつつ、Andries van Dam教授、Henry Fuchs教授の研究分野でもある遠隔医療に関する話題にも多くの時間が割かれた。また、遠隔医療等に関する分野においても重要な要素であるハプティックインタフェースについてのディスカッションの中では、来場されていた岩田教授(筑波大学)が、ハプティックインタフェース研究の専門家としてコメントを求められるといった場面も見られた。

本セッションの登壇者は、ICAT2002に先だってJST/東京大学 館 CREST プロジェクト主催で行われたクレストシンポジウムの講演者を中心としていたため、両方に参加された方には特に興味深いセッションになったと思われる。



パネルセッションの様子